

I 子規・漱石の出会い

子規と漱石が出会ったのは、東京での学生時代です。21歳頃から親しくなった二人は、共通の趣味である「寄席」の話で意気投合します。同じ頃、子規は「七草集」という詩文集を創作し、漱石に批評を求めます。これに刺激を受けた漱石は、漢詩紀行文「木屑録」を作り、今度は子規に批評を求めました。

英語だけではなく漢詩文にも長けた漱石の文学的才能に驚嘆した子規は、漱石を「畏友」として認め、交流を深めてゆきます。

しかし、子規は明治22年5月、大量に喀血し、結核と診断されます。

卯の花の散るまで鳴くか時鳥

など、啼いて血を吐くといわれる「ほととぎす」の俳句をたくさん作った子規は、以後「ほととぎす」の意味を持つ「子規」の雅号を用います。

病と闘いながら文学活動に打ち込む子規。そのような子規に漱石は、

帰ろふと佐かずに笑へ時鳥

などの句を送って励ましました。これが現存する漱石の初めての俳句です。

その後、漱石は大学を卒業、子規は日本新聞社へ入社し、それぞれの道を歩み始めます。

II 子規・漱石の友情

それぞれの道を歩んでいた二人に、再会の時が訪れます。27歳の時、日清戦争の従軍記者となった子規は、帰国途中に大量の喀血。療養を経て帰郷します。この時、漱石が愛媛県尋常中学校の英語教師として赴任していました。

桔梗活けてしばらく仮の書齋哉 子規

愚陀佛は主人の名なり冬籠 漱石

子規は漱石の下宿「愚陀佛庵」に仮寓し、地元の俳句結社「松風会」の仲間と連日句会を催します。やがて漱石もその輪に加わり、子規から熱心に俳句を学ぶようになりました。

二人は道後周辺を散策し、大街道の芝居小屋で狂言を観るなど、穏やかな時間を過ごします。そして子規は、漱石の傍らで「俳句は文学の一部なり」で始まる有名な俳論「俳諧大要」の構想をまとめ、二人は「新しい日本の文学を興そう」と誓い合ったといわれます。

52日間の共同生活を送り、子規は東京へ戻ります。漱石は送別会の席で

御立ちやるか御立ちやれ新酒菊の花

の句を送り、友の無事を願いました。

松山での運命の再会を経て、二人は新しい文学の創造と革新へと歩み始めます。

III 子規・漱石の別れ

東京へ戻った子規は、結核菌に脊髄を侵される脊椎カリエスと診断されます。病床で迫り来る死の恐怖と闘いながら、子規は文学活動に励み、洋画の「写生」を採り入れたその新しい俳句は、若者を中心に全国へと広がりました。

一方、松山から熊本へ転任した漱石は、ここでも熱心に俳句を作り、子規派の俳人として活躍します。さらに漱石は英国へ留学しますが、親友の病苦を慰めるため、異国から子規へ長文の手紙を送り、現地の詳細を記しました。

明治34年11月、子規も漱石に手紙を送ります。そこには「僕ハモードメニナツテシマツタ」「実ハ僕ハ生キテイルノガ苦シイノダ」と、親友にしか打ち明けられない悩みや苦しみが切々と綴られていました。子規は漱石に、また次の手紙を懇願しますが、明治35年9月19日、34歳11ヶ月の生涯を閉じます。

異国の地で子規の訃報に接した漱石は、

筒袖や秋の棺にしたがはず

などの句を詠み、親友の死を悼みました。

共に過ごし、共に笑い、励まし合ってきたかけがえのない友。子規と漱石に、永遠の別れが訪れました。

IV 子規・漱石の功績

漱石との再会を夢見ながら逝った子規。子規が文学にかけた思いは、河東碧梧桐や高浜虚子ら多くの門人たちへと受け継がれます。一方、帰国した漱石は虚子の勧めで小説「吾輩は猫である」を執筆、やがて職業作家となり、「三四郎」や「こゝろ」などの小説を次々と発表しました。

そして、子規が待ち望んだ次の手紙を送れなかった漱石は、『吾輩は猫である』を子規の墓前に捧げます。文豪・漱石が世に問うた数々の名作は、永遠に会うことの叶わない友へあてた手紙の続きだったのかもしれませんが。

子規と漱石が生まれて150年。現在の松山は二人の息遣いが感じられるまちです。

子規研究・顕彰の拠点である子規記念博物館、明治時代を体感できる坂の上の雲ミュージアムをはじめ、市内に点在する句碑や俳句ポスト、若者に俳句を広めた子規の志を継ぐ「俳句甲子園」や新進作家の登竜門として漱石の思いを継ぐ「坊っちゃん文学賞」など、二人が遺したことばと文学が松山を彩っています。

松山市では、子規・漱石生誕150年記念事業を通じて、二人の足跡と功績を「松山から世界へそして未来へ」と伝えていきます。

子規・漱石生誕150年記念事業

主要事業一覧

日時	名称	場所	概要
平成29年 4月1日(土)～	子規記念博物館常設展示室 リニューアルオープン	子規記念博物館 常設展示室	子規記念博物館の常設展示室3階に、新たな映像機器の導入や子規の節目となる名場面を再現した創作人形などの展示を行い、リニューアルオープン。
4月29日(土・祝) ～5月29日(月)	子規・漱石・極堂生誕150年記念 第63回特別企画展「子規・漱石・極堂 一俳句革新の地 松山一」	子規記念博物館 3階特別展示室	子規・漱石の友情や松山での日々、柳原極堂をはじめとする友人たちとの交流などについて、直筆の資料などを紹介しながら3人を顕彰。
6月24日(土)	明治体感☆俳句塾	坂の上の雲ミュージアム	明治時代を体感できる、俳都松山大使・夏井いつきさんによる句会ライブを開催。
7月16日(日)	俳都松山キャラバンin熊本	くまもと森都心プラザ ホール	松山から転任し、漱石が俳人として活躍した熊本市で俳都松山大使によるイベントを開催。
7月29日(土) 平成30年1月20日(土) 独演会:12月17日(日)	まつやま子規亭(計2回) 独演会	子規記念博物館 4階講堂	子規が好んだ落語や大衆演芸の分野から著名人を招き、伝統文化の魅力を発信。 ※12月2日・3日開催の公演は演者の都合により中止
7月25日(火) ～11月26日(日)	坂の上の雲ミュージアム 特別展示「松山と漱石」	坂の上の雲ミュージアム 4階 展示室2	漱石が松山の友人たちに送った手紙や漱石が愛した松山ゆかりの書画などを展示。松山と漱石の関係を人びととの交流から紹介。
8月6日(日)	俳都松山キャラバンin斑鳩	いかるがホール	子規の代表句「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」ゆかりの斑鳩町で、俳都松山大使によるイベントを開催。
8月19・20日 (土・日)	子規・漱石生誕150年記念 第20回俳句甲子園 全国大会 (共催事業)	19日:大街道商店街特設 会場、20日:松山市総合 コミュニティセンター	高校生による俳句の全国大会。150年・20回を記念して全国大会出場チームを36から40に増やし、地方大会・全国大会の会場に記念ブースを設置。
9月2日(土)～10月1日(日) 10月4日(水)～29日(日) *2期に分けて展示替え	子規・漱石・極堂生誕150年記念 平成29年度特別展 「子規博の名品」	子規記念博物館 3階特別展示室	30年以上にわたって収集した資料の中から特に優れたものを、未展示作品を中心に選定し、展示する。展示替えを行いながら、約2ヶ月間開催。
9月24日(日)	「正岡子規のふるさとシンフォニー」 イベント	松山市民会館	作家の新井満さんが子規の俳句にメロディをつけた「正岡子規のふるさとシンフォニー」の誕生3年を祝う記念イベントを開催。
9月24日(日) ～11月19日(日)	松山市・新宿区協働企画展「漱石と子規-松山・東京 友情の足跡-」に併せた松山の観光PR(共催事業)	新宿区立 新宿歴史博物館	新宿歴史博物館で開催される企画展に併せて、ポスター、チラシ、パンフレットを設置するなど、観光PRを実施。
9月27日・28日(水・木)	坊っちゃん劇場 新宿公演 ミュージカル「52days ～愚陀仏庵、 二人の文豪～」(共催事業)	新宿区立 新宿文化センター	子規・漱石の松山での52日間の同居生活を題材にしたミュージカル。松山市が共催し、漱石の生誕地である新宿で公演。
10月14日(土)	子規・漱石・極堂生誕150年 記念式典	子規記念博物館 4階講堂	子規・漱石・極堂の功績を著名人を招いたシンポジウムなどで顕彰する式典を開催。
11月5日(日)	「俳都松山宣言2017 ～十七音が未来を変える～」	松山市民会館	ゲストに藤本敏史さん(FUJIWARA)と村上健志さん(フルーツポンチ)を招き、子規・漱石生誕150年の記念として、俳都松山大使による俳句イベントを開催。
11月26日(日)	第15回「坊っちゃん文学賞」 表彰式	子規記念博物館 4階講堂	漱石ゆかりの松山から新しい青春文学の創造を目指して創設した文学賞。これまでの小説部門に加え、生誕150年を記念して「ショートショート部門」を設置。
12月21日(木)～ 平成30年1月31日(水)	子規・漱石・極堂生誕150年記念 平成30年新春特別展 創作人形展 森川真紀子と子規の世界	子規記念博物館 3階特別展示室	市内在住の創作人形作家・森川真紀子さんによる子規や松山ゆかりの人形を展示。
平成30年2月3日(土)	International Photo-Haiku Festival (国際写真俳句コンテスト)シンポジウム	子規記念博物館 4階講堂	前EU大統領で特別名誉市民のファン・ロンパイ氏や国際俳句交流協会会長の有馬朗人氏など国内外へ高い情報発信力を持つ著名な方々を招聘し、シンポジウムを開催。